

方言性向語彙から見た大分人

～室山敏昭『ヨコ』社会の構造と意味－方言性向語彙から見る－を読んで～

文学部国文学科

松田美香

I 方言性向語彙の研究

方言は、「飾らない普段着のことば」という言い方もされるように、自分らしく振舞うときの言葉だ。小さい頃から使ってきた言葉には、たくさんの記憶が詰まっている。それはその人の人生の記憶と重なる。また、同じ地域に過ごす人々はそこで起きたこと＝歴史を共有すると同時に、それぞれの言葉にまつわる記憶を共有している。それは共通語について日本全国の人が共有しているのともとは密度が全然違う、非常に濃密なものだろう。

そこで方言性向語彙というものを紹介したい。「性向語彙」とは「その人の性格や行動癖・態度や振る舞い」を評価して表すことばの集まりのことである。方言性向語彙とは、たとえば、「働き者」「けち」「のんびり屋」「大食い」などを指す方言～「ハタラキモン」「シミツタレ」「トロスケ」「イヤシボウ」(大分方言)～になる。この研究は、これまで広島・岡山などの中国地方と四国の瀬戸内地域を中心にされてきた。最初に手がけたのは方言学の大家、藤原与一氏(1963年三省堂『方言学』)。そしてその後研究を引き継いだのが、室山敏昭氏である。氏は約30年にわたってこの研究を続けて来られた。

この研究の大きな成果は、中国・四国地方の村落共同体では「デコボコの無い平準化した(ヨコ並びの)人間」が期待されていることを証明したことであろう。つまり、当該地域の村落共同体にとって、あまりにも極端な行動をとる人や突出した性癖のある人は、方言性向語彙(つまり、ことば)によって攻撃され、抑制されているのだ。そ

の言葉は、他者へ向かうばかりではなく、自分の行動規範としても作用する。例えば、人の噂話をして、「あの人はきちんとしていない。家も片づけができていない。不精者だね。」と言う。すると、それを言う本人も、また聞いていて相槌を打つ人も、それではいけないという行動規範を確認することになるというわけだ。室山氏は、江戸時代の村落社会はこうして文字には書かれない行動規範が存在したおかげで、農業や普請がうまく機能したと指摘している。この指摘の通り、とんでもないことを言う人・する人や怠ける人が多数いたのでは、共同作業が成り立たない。それを上から下を押さえるやり方よりも、日本ではヨコの人(例えば、士農工商の農の人同士)が注意するという形の方がうまくいった。そして明治以降もこの「ヨコ」社会の行動規範が機能していたからこそ、日本社会は勤勉で平等な社会を構成しえたということを、方言性向語彙を用いて証明したのである。

その証明の方法は、性向語彙の中でどのような内容を表すものが語彙数を多く持っているかによって、人々が注目している「性向」を浮かび上がらせるというものである。そのためには、たくさんある語をよりよく整理しなければならない。整理することを「カテゴリー化」と言う。このカテゴリー化を最初にしたのも、前述の藤原氏だが、その後を受けて室山氏がさらに詳細なものを構築した。室山(2002)では方言性向語彙の世界を整理してわかりやすく示してくれる仕組みのことを、概念体系としてのシソーラスとしているので、これからはこれを「性向語彙のシソーラス」と呼ぶことにする。この性向語彙のシソーラスについての説明部分を次に引用する。

¹thesaurus: 類語・関連語の辞典。知識の宝庫としての辞典という意味もある。

筆者が『内海文化研究紀要』第15号に示した「性
向語彙のシソーラス」は、(中略)意味と評価の二
つを基軸として統合化を図り、全体をまず「I. 動
作・行為の様態に関するもの、II. 言語活動の様態
に関するもの、III. 精神の在り方に関するもの」と
いう三つの意味分野に大きく分節し、各意味分野の
内部を4段階からなる階層構造に組み替え、全体を
立体的な構造体として構築したものである。室山敏
昭(2002) 50p.

このような研究を大分方言でしてみたら同じ結
果が出るだろうか。地域によって差があるのだら
うか。このような強い興味から、数冊の方言集と
数名への大分方言話者へのインタビューを行った
調査結果を以下に報告する。なお、適宜先行研究
との比較も行う。その結果から、大分方言話者で
ある「大分人」の特徴を証明しようというのがこ
の稿の狙いである。

II 大分における方言性向語彙

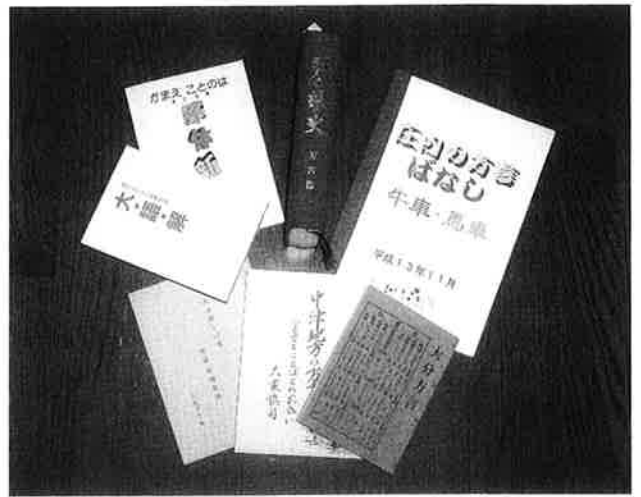
資料は方言集や方言単語集や辞書の形をとって
いるもの9冊を選んだ。今回は比較的最近発行さ
れたものを集めた。古く遡っての調査は稿を改め
て行う予定である。

この調査の結果、それぞれの意味の異なり語数
の合計は535だった。先行研究でも最大1200、最
小300余という結果が出ているので、主要なもの
は網羅できていると思われる。調査地域は、県史
と『大・語・解』は全県を、他は大分郡庄内町、
南海部郡蒲江町、大分郡野津原町である。やや南
部に偏っている感があることを断っておく。調査
結果を稿末の「性向語彙のシソーラス」(資料)
に載せた。

2-1. 発達しているカテゴリーの抽出 ～繁栄 するマイナス語～

先行研究からわかる性向語彙の重要な特徴とし
て、「マイナス評価を表す性向の語が発達してい
る」ことが挙げられる。発達とは詳細に言い分け
られていることであり、バラエティの多さで示す
ことができる。簡単に言えば、褒め言葉は種類が
少なく、けなし言葉は種類が多いということであ
る。

語彙量、意味項目数のいずれも著しくマイナス評



価の方向へ傾斜する<負性の原理>を示している。
(中略)中国・四国地方17地点において、どの方言
社会においても、マイナス評価を表す性向について、
より明確な概念化の要求が集団意識のレベルで働い
た結果であると解することができよう。室山(2002)
129p.

さて、大分方言で数例を挙げる。(プラス評価
とマイナス評価のペア)

<仕事の意欲・能力のある人>の語数(異なり)	31語
<仕事に対する意欲・能力に欠ける人>	64語
<人柄の良い人>	11語
<人柄の悪い人>	59語
<きれいずきな人>	0語
<汚くしている人>	17語

今回の調査結果(資料参照)を広島、山口、鳥
取、島根、愛媛、大分県東国東の8地点(室山
1981年～以降「8地点」とする。)の結果²との
比較してみると、異なる結果は以下の2点であっ
た。

<仕事にに対する意欲・能力に欠ける人>の下位
について、多数の語彙が分布するもの

8地点 「怠け者」「仕事の遅い人」「放蕩
者」「仕事の雑な人」

今回の調査 「仕事の役に立たない人」、「仕事
の遅い人」、「怠け者」、「放蕩者」、
「仕事の雑な人」

<具体的な動作・行為の様態を踏まえた恒常的な
性向を示すもの>

8地点 「小心な人・臆病な人」「怒りっ
ぽい人」

今回の調査 「調子のり・おっちょこちょい」、
「不精者」、「欲の深い人」

上の通り、「仕事の役に立たない人」「放蕩者」や「調子のり・おっちょこちよい」「不精者」などが大分の方言では発達しているという結果になった。それらの大分方言の語源や語構成を、次項から詳しく調べてみたい。

2-2. 分析① 仕事の役に立たない人、仕事の遅い人、怠け者など… [労働秩序] を乱す人

室山(2002)では、性向語彙の諸傾向を貫く柱は、[労働秩序] を乱す人と [つきあい秩序] を乱す人を表す言葉だとの指摘がある。つまり、村落共同体の円滑な運営のために必要な要素は、これら2つに集約され、この2つの秩序を乱す者を攻撃・抑制するのが性向語彙の役割だというわけだ。村落共同体において「過ぎること」は何にせよ歓迎・賞賛されることではなかった。だから、たとえプラス評価に分類されるカテゴリーであっても、常識を越える場合については、「～過ぎる」というマイナス評価の意味を持つ接頭語や比喻が伴った語になる。

まず、「仕事の役に立たない人」は、まさに [労働秩序] を乱す人である。スモツクレンは「酢あるいは巢も作れない」に語源を求める説が多く、「～も作れない」で能力の無いことを表す。

へこたれ腰じゃ すもつくれん (弱々しい腰つきでは、役に立たない。) 『野津原方言(後)』

ヘノツッパリ(ニモナラン)は「屁の突っ張りにもならない」で、何の役にも立たないことを極端な例で示している。ジナシゴロのジナシ「(本地無し)は「正気でない」という意味であることが松本修(1996)で証明されている。それに「放蕩者・道楽(『日本方言大辞典])」の意味のゴロ

ツキモノが下接した語であろう。「正気でない者のように役に立たないで、うろついている」ということだ。この「ジナシゴロ」、そして「カワナガレ」や「ロクシュモネー」は、語を分析すれば「放蕩者」の意味となる。放蕩とは行動に抑制が効かず、自分の欲しいままにすることである。このような人が村の共同作業に役に立たないのは当然のことである。

次の「仕事の遅い人」では、『大分県史方言篇』にグツニューという語がある。「決断力のない・てきぱき出来ない人」という意味である。グツの語源は各方言集によって様々に書かれており、県内だけでなく大阪、山陽・四国各地、宮崎など西日本で使われている。また、グツガヘゲンとも言い、右田(1994)では「理屈がわからない、埒が明かない」とあって、次の例文が載っている。

あん奴は 何ほ 言うて 聞かせてん ぐつが へげん がね。

(あいつは、いくら言っても聞かせても理屈がわからない/埒が明かないんだよ。) 共通語訳は筆者。

今のところ語源は未詳であるが、考えや態度からはっきりないことを意味する語のようである³。他にフタチヌリー、ホオタラヌリーがあり、「頬が垂れている+ぬるい」が語源で、顔に締まりがない様子から仕事に締まりがないことへ意味が拡張したのであろう⁴。

「怠け者」では、方言として有名なゴテーシンがある。語源は「五体死に」と言われている。「五体」とは、体または手足のそれぞれの部分を5部分と数え、全身を指す言葉である。「五体満足」の形で一般的にもよく使われる。それらが皆死んだという意味から、体が働いていない様子を表そうとしているわけである。ズーシンという語

³室山(2002)(前掲書)204p. 「8地点の方言において、語彙量の多い11の語彙項目を、意味分野に分かって示す」とある。

⁴筆者は「愚図」の訛であろうと考える。『日本方言大辞典』には、近畿・四国地域に<動作が緩慢だ>という意味のグズイがあり、ほぼ同じ地域に同じ意味でグツイという地点もある。現代語にもある「ぐずぐずしている」は「ぐずぐずし」という古語に遡ることができる(愚図の漢字は当て字)から、「ぐずぐずし」が「ぐずい/ぐつい」になったと考えられ、そのような人を指す「ぐず/ぐつ」という名詞を生み出し、それに「蛸入道」などのようにやや嘲りの意味を込めて対象を呼ぶ「入道」を下接させたと考える。次第に語源が失われ、グツニュードーのドーが省略されて(言い易さ語源不理解)、グツニューとなったのではないだろうか。なお、「愚図入道」との語源は、高田(1970)に有り。また、「埒の明かぬ人」をグツロ(グツ+郎)と言うと『西白杵方言考』(原田欣三1968)にもあるから、グツ自体にマイナス評価の意味が存在すると考えられる。

もあり、ズーは「髓（ズイ）」の訛で、「体の髓+死に」だから、ゴテーシと同様の意味と言っている。さらにズウシロウは「髓+死に+郎」、ズウタクレは「髓+タクレ」となる。「タクレ」には前出の松本修（1996）に詳しい語源分析があり、昔の中国の伝説にある間抜けな動物タクラダであるという。やがてタクラダの語源が忘れられ、語が縮まってタクレになったとされている。「ノンダクレ」「ヘッタクレ」なども、「タクレ」が「間抜け・ばかな者」を意味すると考えた方がうまく説明ができるので、筆者もこの説を採用⁵。

さて、対する「仕事に対する意欲・能力のありすぎる人」のカテゴリーを見てみると、ノボセアガルという語があって「人一倍仕事に熱中する人」という意味である。ノボセルとは、「血が頭にのぼる。逆上する」ということである。また、ハエーガトリエ（早いが取り得）なども、皮肉が入っているようだ。『野津原方言単語集（後編）』にネベヤツ、シチネベ「辛抱強い人」がある。シチ…は、広辞苑第5版に「程度がひどく、ごたごたしているさまを表す。ひち。」とあり、大分方言でもシチクジイ・シチクジネベエ「しつこい。くどい。」（『大・語・解』）、シチメンド「難しい事。」（『野津原方言単語集（後編）』）とあるから、「程度が過ぎていて、好ましくないときに使うようである。シチが付かない場合も、

ナント ネベエヤツチャノウ（しつこい奴だなあ）
『かまえ ことのは 解体新書』

と、評価は高くない。仕事が遅すぎても早すぎても、熱心すぎても評価・賞賛されない方言社会が見えてくる。

方言性向語彙について何例か見てきて、「指向価値そのものよりも、より多くの過小価値と過剰価値を言語化することによって、指向価値を的確に示すことができる」という仕組みに気づく。すでに室山（2002）に示されていることである。よくないことを指摘して矯正すれば、結果はすばらしくいいとまでいかなくとも、「まあ、いい」に



はなる。その他にも「儉約家」と「けち」と「欲の深い人」、「賢い人」と「ばか者」と「ずる賢い人」などにも同じような関係が見られる。

2-3. 分析② ひねくれ者、意地悪、お調子のりなど… [つきあい秩序] を乱す人

室山（2002）では、Ⅲc.の〈人柄の善悪に関するもの〉の下位〈人柄の悪い人〉の中に「意地悪・根性悪」はないが、各大分方言集にはこのように書かれたものがあまりにも多いため、「ひねくれ者」の中に書き加えた。クサレは、「素直じゃない。根性の腐った者」（『大分県史方言篇』ほか）、オロイイは「疎良い」であり、不完全な様子や確かではないという意味の接頭語だが、大分方言では「意地が悪い」という意味になる。サカクジは「逆籤」で「わざと反対をする」である。ショウネガヒジエはヒジエが「ひどい」の音変化だから「性根がひどい」、シネガワリイはシネ（『野津原方言単語集』）ともいい、「根性が悪い」の意味である。このシネの語源は未詳である。他にアカネコがあり、アカは程度がひどい意味（山口県防府市野島。室山2002）の接頭語、ネコは一般的には人の言うことを聞かない動物である。ヌヒトヤローは「盗人野郎」、ネベータチは「粘っこい性質」、ゲサキエは「下品な」である。

くちゃくちゃ 音を 立てちから ゲサキエ喰いか

⁴もちろん、最初は比喩表現として使われたのだが、語源を理解しないで使う人が多くなるともはや比喩表現とはいえなくなる。

⁵バカタレのタレもバカタクレの変化だと考えた方が納得がいく。タレを「垂れ」とする説もあるが、それではタクレを説明できない。松本（1996）に各地でバカタクラ、バカクタクラ、バカダタクラダ、コバガタクレの報告があるとも。

たを すんなっ!

大野秀臣2003『大分話し言葉用語用例辞典』

また、「乱暴者」の意味のヤシヤは「夜叉」、アラムテエは「荒無体(『日本方言大辞典』)」、ゴクドーは「極道」であろう。

次に、「調子のり・おっちょこちよい」を表す語が大分方言では特に発達している理由を考えたい。チュウカンハルは「目立とうとして騒ぐ」こと、オチュウカンは「目立とうとして騒ぐ人」、チューチュースルは「落ち着きがない。滑稽な人、冗談言い、お追従言い」である。島根県今田方言にチャーチャースルがあり、「絶え間なくしゃべる人(室山2002)」とある。チューやチャーは騒ぐ様子を表す語であろうか。他にチュウレン、ツリアガリがあり、「とんでもない悪ふざけをする。チュウカンよりも上」を表す。

アリヤー チューカンジャケー トリアウナ ハンブン キートキヤー イー

(あの人は調子のりだから、まともに取り合うな。話を半分聞いておけばいい。)

大分郡挾間町 柚野武裕氏。

チューとかハルとかツリアガルとかいう語は、「中」「宙」「張る」「吊り上る」という空間と関係がある語を想起させる。そう考えると、大分方言では目立とうとして騒ぐ人の様子を空間的にとらえ、人々の中から半分浮き上がった状態である「中間・宙間」や、もっと高い所まで行く「吊り上り」と表現したのではないだろうか。ヒトスベーは「人見知りの反対・人が来るといつもよりはしゃぐ子どもなどのこと」で、語源は「人戯え(『大分県史方言篇』)」である。トツパゴロは「軽い人、ちゅうかんを言う」で「Toppa」とは『日葡辞書』に「トツパ(軽はずみな(者)・不注意な(者))」とある⁸。また、ドークルは「道化する(松田・日高1995)」、ホメジョウズ「褒め上手」、アンポンタン(「安本丹」江戸時代に流行した薬名。「アッポ(アホウ)」から(松本1996)、スウ

りは「何食わぬ顔で嘘を言う意のスラリから(室山2002)」、センスラは「千に三つしか本当のことを言わない」のセンミツという語とスラリの混交語かと思われる。何食わぬ顔で有る事無い事を言い、皆を沸かせるということだろうか。他にトブ、ノリテなど数多くの語があり、いかにこのカテゴリーが人々によって言い分けられ、発達してきたかがわかる。「チュウカン(中間)」にしても「ツリアガリ(吊り上り)」にしても、過剰に騒ぐことによって、皆の和から浮かび上がることを批判した言葉である。この中には「ばか者」や「嘘つき」も意味する語が含まれている。トツパ、スウリ、センスラ、アンポンタンがそうである。人並みからはずれてはしゃいだり騒いだりすれば、作業・話合いなども進まないし、言わなくてもいいことを言ってしまって、角が立つことも多い。これらは子どもに言うことが多いという。人間には人から注目されたい、人が集まったら楽しく過ごしたいという欲望があり、子どもの頃はそれが抑制されておらず、絶えず言い聞かせる必要があったのだろう。

さらに「嘘つき」を見てみよう。スーラ(『野津原方言(後編)』)、センスラ(福岡県豊前市。井上1999)は、先述の「調子のり・おっちょこちよい」の意味もある。ケトロク、ストロクはケトロク、ケツロクとも言う。語源はケ+トロクだが、~ロク(六)という男性の名前になぞらえている⁹。また、トロクはトロイ「馬鹿、愚か、動作が鈍い」の活用変化形。スツパンプウはスツパリ「全部、すっかり」とプウは「惚け」の訛とも思えるが、語源は未詳である。嘘をつくことは、間違いなく[つきあい秩序]を乱す可能性を秘めているが、思いの外厳しいマイナス表現はない。

プラス評価と思われる語を一応見ておこう。「優しい人」マテーの語源は「真体・真手(『日本方言大辞典』、『日葡辞書』)」であり、「まっすぐ」という意味から来ている。大分では気が弱い意味

⁸ 「シネはシナ(品)の転か」『日本方言大辞典』(上)

⁷ あるいは鼠などの鳴き声を絶え間なく喋る様に喩えて「チューチュー」としたのかもしれないが、それはチューカンなどの語源がわからなくなっているからの、類推によるものだろう。

⁸ 大分県豊後高田市ではトツパイで「嘘つき」を表す。

⁹ 室山(2002)の「性向語彙における<男性>性の原理」に詳しい。

もあるようだが、一本気という語を想起させる。他に「仏様」の意味のマンマサン、「かわいそうがる」の意味のムゲナガルは、その人に同情心が豊かであるという面を表現しているようだ。次に「穏和な人」のネキニは、ネキが大分方言で「側」という意味だから、側にいて欲しい人ということであろうか。キガイイは「気がいい」で、性格や気質のよさを表現しているものであろう。「あっさりした人」の意味のキサナはキサが「気持ち(『日本方言大辞典』東北、鳥取・島根)」の方言であり、キサガイイとも言う。アケノンコンは「飽きが来ない」の訛だろう。このような人と付き合うと、いい気質を感じたり、嫌気がさしたりすることがないことを表現している。

人目に立たない程度が度を越すと、やはり厳しいマイナス評価を受けることになる。「小心者・臆病者」は先の「仕事の役に立たない」という意味も持つグツニュー、それからヒトミズは「人見ず」、センコゲツは「線香尻」、クニヤムは「苦に病む」で対人関係においていつまでも思い悩む様を表している。あまりに人に引け目を感じている人もまた、結局は「つきあい秩序」を乱すことになる可能性が高い。ここにマイナス評価の語や句が使われているのは、そのためであろう。

2-4. 分析③ 放蕩者(番外を含む)…秩序外を表す語彙

さて、分析の最後は秩序の外にいとされる人々についての語を見てみよう。

まず、「放蕩者」を意味するゲドサレの語源は「外道され」(鳥取県倉吉市生田。誰からも相手にされない人。悪知恵者)で、「外道」とは仏教用語で仏教以外の教えや教えを奉ずる者のことである(『広辞苑 第5版』)。「外道にされる」とは、共同体員から仲間ではないという烙印を押されるということで、仲間外れにされると同義であろう。他にゴクドウ「極道・獄道」、クズ「屑」、スータロウ「風来坊」、ゴクタレ「極+タクレ」があるが、どれも自分たちの仲間ではない、あるいは相手にする価値がないという意味があり、激しい非難の意味を持つ。

あのやうなごくどうと腐り合ふたお花が行末、
流浪は知れた事
(浄瑠璃『長町女腹切』中巻。『日本方言大辞典』)

とあるように、古くからゴクドウという性向語彙は流浪するという行為につながるという認識があった。

ゲドサレはまた、「道楽者」の意味も持つ。道楽者は労働とは異なるものに耽る者であり、皆に合わせて作業することとは両立しにくい性向である。結果として、誰にも相手にされないことを表現したと考えられる。ダマリモンは「仕事もせずにダラダラとした日々を送り、遊びまわっている人」のことであり、

今のわけーしは だまりもんが おいいう(今の若い人は、仕事もせず遊び回っている人が多い)『かまえ』

のように使われている。ゴテモンのゴテは「ぜいたく。ぜいたく好き。」のことで、香川県では「厄介者」の意味を持っている。

次に、番外として挙げた部分について触れておきたい。「不思議・妙な・変な人」のアジラシイ、ドウカラシイは同じ意味とある。アジは「味」で、あり、「変なさま、妙なさま、不振なさま」(『日本方言大辞典』)とあり、高知県幡多郡で「こりゃあじな奴だ」など、全国の各地に分布がある。ドウカラシイは語源未詳だが、ドウカ「如何か」であって、人物の判断が下せないことを表しているものと思われる。

妙なこと、変わったことをする人や、バカなことをしたり要領を得ない人を指して言う。色々な意味が複合された言葉。あじらしいやっちゃのう(変った奴だなあ) = どうからしい 『かまえ ことのは 解体新書』

他にヒョウロクダマは「つかみどころのない人」で、「飄々とした」の意味のヒョウに男性名「六」、さらに「玉」を付けたものではないか。ヒューゲ Chol は「変わり者」で、イヒューという「異風」の訛と思われる。クセモンは「曲者」、ヂナゴロは2-1と同じ「本地無し+ゴロ」、ヒネクレ、ヒチムズカシイ、ヘネチョコ、ヘネ Chol (変わっている)、ヘンチョコ、フウガワリ、ロクシュモネエ、ウクヤツは「浮く奴」、ヘンジン、ヘンクツ、ヘンナヤターと続く。ノユーナという「異変者」の意味の語は語源未詳である¹⁰。「不思議・妙な・変な人」の異なり語数は19で、これも発達しているカテゴリーと言えるだろう。このカテゴリーは、共同体にどこか馴染まぬところがあり、

「変な」「異なる」「曲がった」「浮く」などの意味の語が関わっている。ジナゴロ、ロクシュモネーなどの語も使われており、「放蕩者」や「仲間はずれ」と語が重なっている。共同体から危険信号が出ている時点の語彙と考えられる。

III まとめ—方言性向語彙と大分人—

今回は、室山（2002他）の成果を大分方言に活用して、大分人の性向の特徴を見出そうとした。その結果、いくつかの特徴が浮かび上がってきた。

1. 意地悪・根性悪

大分方言における「人柄の悪い人」（意地悪・根性悪）の語彙量の多さは、際立っている。意地悪や根性悪は、一番の攻撃対象であったことがわかる。

2. 調子のり・おっちょこちょい

大分方言の「調子のり・おっちょこちょい」の語彙量の多さもまた際立っている。「嘘つき」や「不思議・妙な・変な人」と語彙の重複が見られること、「放蕩者」「仲間はずれ」ほどの辛辣さが無いことから、その中程に位置すると認識されている。先行研究と比較した結果、大分方言ではひと際発達している。

3. 仕事の役に立たない人・怠け者・仕事の遅い人

「仕事の役に立たない人」は「放蕩者」と語彙の重複が見られる。「怠け者」の語彙にも、強烈な攻撃性（「五体+死に」「髓+死に」）を感じる。「仕事の遅い人」にはそれ程の攻撃性は感じられないが、やはり大分方言独特と思われるグツニューなどの語が見られる。

〔労働秩序〕、〔つきあい秩序〕を乱す者は、程度が過ぎれば共同体の中に入れてもらえない「放蕩者」となる。「調子のり・おっちょこちょい」を要注意と見做し、「怠け者」「ばか者」「ひねくれ者」「変わり者」はぎりぎりのところで共同体にとどまっている状態である。このことは、逆に言えば穏やかで素直で特に目立たない、仕事にもほどほど励む人物を善しとしたということだ。こ

のような性向を持った人物が村落共同体の維持にとって好ましかったし、そうであるように共同体からの圧力を言葉によっても絶えず受けて来たであろうことが、各方言集やインタビューから明らかになった。

IV 考察および今後の課題—方言性向語彙の変容—

方言性向語彙のマイナス評価への偏りからは、「褒めて育てる」とは正反対の「けなして躰ける」傾向が窺われる。しかし、多くを望まない点は評価すべきかもしれない。そもそも何か一つでもナンバーワンになれとか自分の個性を伸ばせなどという、広大無辺な課題を突きつけられることが、子供たちにとって本当に幸せなことなのだろうか。一方、性向語彙には、あくまでも「人並み」が目標であり、個性的であることを求めないで、周りの人々とそこそこうまくやっつけようとする姿勢が貫かれている。その裏には「人は一人では生きていけない。共同体の中で生きるべきだ」という確信と、自分の生活への「特別よくも悪くもなく」という悟りが存在する。悟りとは一種の諦めでもあり、このような発想からは能力や才能の芽を摘み取る教育しかできないと、激しく攻撃されてきたもの、そのものが方言性向語彙の中には脈々と流れているのである。それだからこそ、方言は蔑まれ、人々から疎んじられた。祖父母や父母の言っていることは古いと、聞く耳を持たれなかったのである。それでは、現在、はたして大多数の国民が能力や才能を開花させているのだろうか。確かに、若者が地域や家族に縛られる率は低くなったように見受けられる。しかし同時に、人としてのルールや労働についての倫理観がわからないとしか思えない若い世代、または事件の犯人像が増えたと感じるのは筆者だけであろうか。

極めて重要なことは、方言性向語彙が機能していた世界には、「人並み」の労働力と人づきあいを可能にするための詳細な語彙による行動抑制システムが用意されていたということではないだろうか。今日の我々の社会には、これらに替わるど

¹⁰日本各地に分布があるノフーズク（野風俗）「野卑な、無礼な、傍若無人な人（『日本方言大辞典（下）』）」に通じるものか。

のようなものが用意され機能しているだろうかとか考えるとき、かなり心許無い気がするのである。

大分方言からは、確かに〔労働秩序〕と〔つきあい秩序〕を維持するための豊富な語彙を見ることができた。そして、「調子のり・おっちょこちょい」についての語彙が発達している点が特徴的であった。大分は古くから共同作業が多く、人々の団結・協力が大事にされていた土地なのであろう。人々の目も相当に厳しく、意地悪や嘘つきだけでなく、目立つことさえ矯正すべき性向の筆頭に挙げられたようである。調子にのって大騒ぎする者は得てして嘘付きでもあり、誰からも相手にされなくなり、果ては放蕩者へという道を辿り易いことを大人はよく知っていたからであろう。だからこそ調子のりの段階で正す必要を感じていたのである。言葉によって、大人たちが子供の躰を行い、共同作業しやすい環境を整えていたのである。このような当時の様子が、これまで行ってきた方言性向語彙の整理と分析からわかってきた。

最後に、方言性向語彙の将来を考えてみたい。

〔愛媛県〕宇和島市方言の性向語彙に見られる変容の実態と傾向性を総合的に解釈する（中略）。方言色の濃厚な語彙が捨て去られ、代わりに（中略）いわば客観的な評価語彙が盛んになりつつある。」
室山(2002) 228～229p.

人々に何度も使われた言葉は変化し、次第に語源不明となる。そういった語の中には深い示唆に富む意味を持つ語も多いだろう。そのような語が消え、性向の中でも表面的なことだけを表す語が発達するようになっていくということである。このような傾向の中でこそ、古い性向語彙を調査し、大分人の生活における秩序を明らかにしておくことが必要ではないだろうか。

本稿は、平成15年度別府大学公開講座「国際文化論」の中で、「方言にみられる情報選択」（2003年10月22日（水）10：40～12：10）として講演したものに、加筆・修正したものです。発表にあたって、大分郡挾間町役場の柚野武裕氏と佐藤義朗氏にご教示いただきました。記して感謝申し上げます。

【大分方言参考資料】

『大分県史方言篇』大分県総務部総務課（1991.03）
大分県

『野津原方言（前・後編）』野津原方言調査会（1995.03）野津原町教育委員会

『大分弁語録解説（大・語・解）』第6版

月刊シティ情報大分プラス編（1998.07）おおいたインフォメーションハウス

『かまえ ことのは 解体新書－蒲江町の方言集－』蒲江町教育委員会（2000.03）大分県南海部郡蒲江町

『庄内の方言ばなし 牛車・馬車』（2001.11）語り手／森田イリエ（当時88歳）、聞き手／安藤 絹

『野津原方言集続編5』野津原方言調査会（2002.08）

『野津原方言単語集（前・後編）』野津原方言調査会（2003.05）

【参考文献】

- 井上博文（1992）「大分県東国東郡姫島村方言に於ける方言性向語彙資料」『内海文化研究紀要』第21号
大野秀臣2003『大分方言用語用例集』（自費出版）
大家慎司2003『中津地方の方言～ふるさとのことばと出会い～』（自費出版）
高田一彦1970『大分方言』（自費出版）
徳川宗賢 監修 1998『日本方言大辞典』（第8刷）小学館
原田欣三1968『西臼杵方言考』高橋書店
松田正義・日高貢一郎1996『大分方言30年の変容』明治書院
松田正義1978『古方言書の追跡研究』明治書院
松本 修1996『全国アホ・バカ分布考－はるかなる言葉の旅路－』新潮文庫（1993太田出版）
右田典哉1994『例解日田方言』（自費出版）
室山敏昭2002『「ヨコ」社会の構造と意味－方言性向語彙に見る－』和泉書院
室山敏昭2000『方言語彙論の方法』和泉書院
室山敏昭1998『生活語彙の構造と地域文化－文化言語学序説－』和泉書院

資料：性向語彙のシンソーラス
「方言性向語彙から見た大分人」
(参考：室山敏昭(2002)『ヨコ』社会の構造と意味—方言性向語彙に見る—』和泉書院)

I. 動作・行為の採態に重点を置くもの	a. 仕事に対する態度に關係するもの	A. 仕事に対する意欲・能力のある人	働きの者	大分県史方言篇	庄内の方言ばなし牛車馬車	かまえは、解体新書エジイ	野津原方言(前編)	野津原方言(後編)	野津原方言彙編5	野津原方言彙集(前編)	野津原方言彙集(後編)	現代大分弁の基礎知識「大・語・解」	語彙分布数	異なり語彙数
			仕事の上手な人											1
			仕事の速い・要領のいい人											7
			仕事を丁寧・丹念にする人											5
			丁寧すぎる人											6
			辛抱強い人											2
			人一倍仕事に熱中する人											7
			B. 仕事に対する意欲・能力に欠ける人											3
			怠け者・仕事をしない人											11
			仕事の下手な人											10
			仕事の速い人・要領の悪い人											7
			仕事を遅にする人											17
			仕事を投げやりにする人											4
			仕事の役に立たない人											6
			放蕩者											20
			b. 具体的な動作・行為の採態を踏まえた恒常的な性向を示すもの											7
			きれいすぎない人											0
			特別にきれいな人											0
			〈汚くしている人〉											1
			片付けの悪い人											2

大分県方言集	任内の方言ばなし牛車・馬車	かまゑ ことのは 解体新書	野津原方言(前編)	野津原方言(後編)	野津原方言集 続編5	野津原方言集(前編)	野津原方言集(後編)	現代大分市の基礎知識「大分語」	言葉分布	異なり言葉数
ゴ「テーク」サシ、ゴ「テーク」ズ「テーク」フ「テーク」ナ	不精者	ビツタレ	サマーネー、ビツタレ	ビツター		ゴ「テーク」ナリ、フリカマワズ、ビツタレ、ビツチオナゴ、ヤクダダ	ウツチヤロ、シマラン、ズ「シロ」、ズボラ、ズロコグ、モサモサ、	ビツタレ	22	17
	<物事に動じない人>					エラモン	オウヨウ		1	1
	沈着冷静な人・落ち着いた人					キガヌリー			2	2
	のんきな人		キマグレ、ヌルマユ、ノボホン			ハンキボーズ、ヘラハラット、ユナシ	アンキモン、レシジョン、トロスケ、フウタヌリ、ホヤスケ		11	11
	大胆・豪胆な人				ムコーミズ	ノブチー	ホネアリ		3	3
	図太い人					ハブトカヤス	セゴニマツ	オーチヤキ	1	1
	機柄な人・生意気な人	シヤラクセエ	ワサボウ、ゴ「テーク」ン、ゴ「テーク」ンビョウ				コダガシイ、コンチクシヨウ、チレツトシチヨル、ノ「ナ		16	14
	<物事に動じやすい人>									
	落ち着きのない人	キジョウシイ		ソラワイキ				ガサゴ、キジヨ		
	じっとしていられないであれこれする人	シ、チュエ、チュウスル、チュウラエ、チュウラエ、ケチユウ		ジョウシイ、キゼワシイ						
	気分の変わりやすい人									
	小心な人・臆病な人	グ「ツ」ニユ「ー				キムスカシイ	センゴグツ、ヒトミズ		1	1
	内弁慶な人								5	5
	外では陽気だが家では無口な人								2	2
	極端に遠慮する人		ヒミズ、ヒミズラ						0	0
	<乱暴な人>								0	0
	いたずらもの	ワヤク	ワヤク、ワルボウ			ワルボウ				
	乱暴な人	ワヤク(狂)							5	2
	面白小僧・船乗におえない子	ワルコボ	アラムテエ	ガキタレ、ガサゴ		ガサゴ、ワルガ	キケモン、ヨク		4	4
	お駄賃					ハネコマ			6	5
	わがままな子	イハカリ	ハネコマ			ワレテマシ			2	1
	<軽率な人>								2	2
	調子のり・おちよこちよい	トツハコロ		オチユーリ、ツリアガル、ツーテンカン		イクレ、オチユーリ、チュウレン、ツリアガリ、ツインカ、ドークル、ホメジョウズ	アテンボカ、アンボシタン、ウマチヨコ、ストコラ、チュウレン、ツリアガリ、トブ、ノリテ、ヒチナシユ		26	24

対人関係を前提とするもの	大分県史方言篇	庄内方言はなし牛草・馬車	かまえ、このは解体新書	野津原方言(前編)	野津原方言(後編)	野津原方言集(続編5)	野津原方言集(前編)	野津原方言集(後編)	現代大分の基礎知識「大分語・解」	語彙分布数	異なり語彙数	
滑稽なことをする人		ヒヨウカンジン		チュウカン、チュウレシ、ヒョーグル、ワキヤガル	ヒューゲチヨ		チュウカン、チュウレン、ヒューゲモン	キツチヨム(吉四六)			10	8
<好奇心の強い人>												
物真似人												
冒険好きな人												
出歩の好きな人												
<感情表出に偏向のある人>												
怒りっぽい人												
涙もろい人												
よく泣く人												
いつもにやにやしている人				ハラタテクロ								
<気温に関して偏向のある人>												
寒がりな人												
暑がりな人												
<飲食に関して偏向のある人>												
大食漢												
いじきたない人												
食べるのが特別早い人												
大酒のみ												
酒を飲まない人												
酔っ払ってからむ人												
<食品に執着する人>												
欲の深い人												
けちな人・しみつたれ												
倏約家												
浪費家												
道楽者												
世話好きな人												
出しやばり・お節介焼く												
愛想のよい人												
無愛想な人												
見栄を張る人												
自慢する人												
気がきく人												
気がきかない人												

高語活動の様態に重点を置くもの	口数に関するもの	口数の多い人・おしゃべり	大分県史方言篇	庄内の方言ばなし牛車馬	かまえ、ことのは 解体新書	野津原方言(前編)	野津原方言(後編)	野津原方言集(続編5)	野津原方言集(前編)	野津原方言集(後編)	野津原方言集(後編)	野津原方言集(前編)	野津原方言集(後編)	現代大分県の基礎知識「大分県」	言葉分布数	異なり言葉数
	口数に関するもの	口数の多い人・おしゃべり	アゴタン、クチハツ、クチハツ、クチハツ、クチハツ	アゴタンガサ、アゴタンガサ、アゴタンガサ	アゴタンガサ、アゴタンガサ、アゴタンガサ	オシヤベリ、クチハツ、クチハツ、クチハツ	アゴタン	アゴタン	アゴタン	カルブチ	アゴタン	アゴタン	アゴタン	アゴタン	16	15
		無口な人	コバス、ベレンク、ローナ	ヒクゲモン											0	
		口の達者な人・能弁家														
	言語活動の内容に関するもの	口下手な人														
		<真実でないことを言う人>														
		嘘つき	ケトロク	スツパンブク、センスラ												
		口のうまい人・口から出任せを言う人		デケンロ												
		誇大家		ホラフキ	ギョウラシイモン											
		冗談言い		ケトウジン												
		<心にもないことを言う人>														
		お世辞を言い	メース													
		お追従言い		チュウラカス、トゴヤカス(ともに、おだて)												
		<性悪なことを言う人>														
		悪意のあることを言う人・毒舌家			ハバシイ	キシメク、トツバ、ニガウリ、ネツチスルガウ、ヤカマシイ										
		口やかましい人		セセカマシイ		ジューバロツツキ	コゼウシイ	コダカシイ								
		他人のことを口出しする人														
		不平を言う人	グ「ゼ」ル													
		理屈っぽく言う人														
	言語活動のあり方に関するもの	評判言い														
		言葉づかいが乱暴な人														
精神の在り方に関するもの	固定的な性向に関するもの	堅物					カタブツ		カタブツ		カタブツ		カタブツ			4

		大分県史方言篇 ジョーシキ	庄内の方言「ば なし牛草・馬 草」	かまえ ことの は 解体新書	野津原方言(前編)	野津原方言 (後編)	野津原方言集 続編5	野津原方言集 (前編)	野津原方言集 (後編)	現代大分県の 基礎知識「大 語・野」	語彙分 布数	異なり 語彙数
	強情な人・頑固者					カタブツ	セニマツガ		方ガツイ、ダテ サミ、ネバリ キ、マケイジ			
	優しい人 偉しい人 謙直な人 謙直な人 勝ち気な人 すぐに泣き言を言う	マテー			マテー メノメノ		マンマサン	ムゲナガル	スーダロウ		7 0 4 1 2 0 0	7 0 3 1 2 0 0
	知識・知能の 程度に関するもの											
	賢い人・思慮分別の ある人	ガシキ							ニンジキモン、ネ コカブリ、ハガキ ルル、バカシウウ ジキ、リコウモン	アタマツカイヨ、 シャントコベ		
	ずる賢い人	ガシキ		ガシキ、コシ イ、コシキーモ ン		コスガル			カンジョイイ、ゲ ドサレ	ウチマタコーヤ ク、ゴマカシゲ セ、ズル、スレ	9	8
	見識の広い人 <愚かな人>								カンクラウ		13	12
	ばか者	ア「ボ、オタカ ラ、サラバカ、ジ 「ナシ	タワケ	アジラシイ、ド ウカラシイ		アホタラシイ	ハカシウジキ		アホータン、ア ホーダシ、アテン ボカ、アンボンタ ン、ジナシ、ドンナ アマチヤン、アマ チヨコ、アラマシト オル	ナバ、ハカヤ ロウ、ハカメ ロ、バカドー	22	21
	世間知らず		ジナシゴロ			ヒトムシ	ヒトムシ				6	5
	人づきあいの悪い人										0	0
	人柄の善悪 に関するもの											
	<人柄の良い人>	カ「イシダ キサンナ ジ「ツテ「ー			キサガイイ シヨージキナ、バカ シヨウジキ	チガテー	マジメクサツチ		アケノコン		1 3	1 3
	人格の優れた人 あつさりした人										5	5
	誠実な人・実直な人		ネキニ						キサガイイ		2	2
	穏和な人・いわゆる 善人										0	0
	<人柄の悪い人>										0	0
	不親切な人	オ「ロイ「ー、ガ 「ンタレ、ク「サ レ、ゲ「サキ 「ー		オロイ	ケンタイ クサレ、クサレハ ル、クソボウス、ケ サキー、ハラグリイ、 ヒネクレ、ヘノマガリ	アカガアル、 オロイ、シネ ガワリイ、サカ クジ	イジワリー、 イジウネガヒ ジー、コンジョ クサレ	ウダタ、ドクテ ネ、ネツチスルガ ウ、ヒネクレ、ヘ ソマガリ、ヘネ チヨコ、ムツカシ モン、ロクシユモ ネエ、シネガワリ イ、ソゲーオロイ イ、ハラグリー、 ヒチネベー	シブンカツチ アカネコ、イジキ タネー、イジワ リー、オロイゲ ネー、キケモン、 クサレツツ、シ ネ、又ヒワリー、 又ヒヤロー、ネ ベーヤツ、ネベ ー、ネワル、ハ ラグリー、エゲツ	2	2	
	ひねくれ者										50	36

